

世界をみつめて4

焚書

岡本 俊裕

文科系の専門の、大学の教員は誰もが一定量の本を買うと思うが、読んだ後の本は、どう処理しているのだろうか。本は量がまとまると、とても重いし、苦勞して読み取った情報は、その重みで何十年の後までも、私たちに圧迫し続けることがある。

読後の本の処理には、私もほとんど手を焼いていた。だが最近では、その解決のために、「本殺し」をしている。

まず第一に、本の中にどんどん書き込みをし、必要なページは切り取る。本は、もはや敬し奉っておくだけのものではない。使うべきものである。そのために私は、本を躊躇なくバラす。しかしこれだけでは本の虐待にはなっても、殺しにまではならない。次の段階として、不要な本は捨てる。本の延命のために古本屋に売ったりはしない。不要と決めれば、これまた躊躇なく捨てるのである。そしてあっさりと次の本の処理に移る。

このようなことを繰り返しているうちに、私の中では不思議なことがおこった。本を捨てると、意識の中で本の権威もどんどんと死んでいくのである。すると、本の重みは消え去り、本の内容が正しいという言葉も響かなくなる。本殺しが成功し、私は本から自由になった。この儀式を経ることによって、本の権威と、全ての本を正しいとする虚妄から逃れることができたのである。捨てられた本の屍が累々とすればするほど、私は自由になり、本のくび木から解放される。

私の本殺しなどは、単に私個人の世界での体験だが、歴史上人類は何度か、国家レベルでの本殺しを行っている。

その中で一番有名なものは、秦の始皇帝によるいわゆる焚書坑儒である。この時にどんな本がどれほど焼かれたのかは、詳らかにする方法はない。だが、恐らくかなり徹底的に本に対する殺戮は行われたのだろう。なにせ、直前まで秦のライバルであった趙などの六つの国の文字を少しも残さずに、それを記憶する学者ともども、

消滅させたのだからものすごい。しかし、一見暴挙にしか思えないこの行為によって、中国の文明は自立を得るのである。

歴史に「もし」は禁物だが、この焚書坑儒がなければ、中国のその後の文明は、これほどはっきりとした中国らしさを持つこともなく、中央・西アジアとの相違は今ほど明確なものではなかったかもしれない。中国文明は、秦の成立時のこの事件をイニシエーションとして、自立したのである。この意味で始皇帝は、単なる中国最初の統一者だけではなく、むしろそれよりも中国とその周辺の諸地域、いわゆる漢字文化圏における文明の創始者という性格の人物であったと考えられる。漢字文化圏は、この徹底した焚書坑儒でもって自立したのである。

焚書の近いところの例としては、ナチスドイツによるものが有名だ。秦と比べると中途半端なもので、多くの「焼きもれ」があったが、この焚書によっても、反ナチス的な書物やフロイトなどのユダヤ人の著作は徹底的に焼かれた。

しかしナチスは結局、聖書を焼くことはなかった。私は、聖書の内容がナチスの方針に合わないから焼くべきだった、と単純に言っているのではない。もしナチスの帝国が新たな文明を築くほど徹底した自立を求めたのであれば、始皇帝のように後の世に恨みを残すほど徹底的に本を焼き殺し尽くすべきだった、と言いたいのである。焚書によって、それまでのヨーロッパの文化・文明を一旦リセットする大胆さを持つこともなく、ヒトラーは、その野望とともに自らが焼かれるはめになる。彼は、始皇帝にはなれなかった。

本は今、転換点に立つ。コンピュータという新たな器の中に、文字や画像情報として、言葉が記録され始めたからである。一旦コンピュータの中に入ってしまうと、本をやぶいても焼いても、殺すことはできない。コンピュータが、本に新たな永遠の生命を付与したのである。

しかしこれで、私たちは、本から逃れることができなくなった。過去の蓄積という重荷を人類は、永遠に負い続けなければならない。もはや焚書という名の「歴史のリセット」ができなくなったからである。

おかもと としひろ（教授・中国語学）